

2021年度
海洋教育パイオニアスクールプログラム
実践記録集

浜中町立散布小中学校

目次

■ 発刊の言葉・発刊に寄せて	1
1 本校の海洋教育に関するグランドデザイン	4
2 今年度の実践	
(1) 1・2年生の取組	9
(2) 3・4年生の取組	10
(3) 5・6年生の取組	12
(4) あさり島活動	16
(5) NPO 法人シマフクロウ・エイド	18
(6) 地域大感謝祭	19
(7) 公開研究会	21
3 今年度の年間カリキュラム	
(1) 「散布学（海洋編）」の年間カリキュラムについて	27
(2) 1年生	29
(3) 2年生	30
(4) 3・4年生	31
(5) 5・6年生	32
4 次年度以降の年間カリキュラム	
(1) A・B年度一覧表	34
5 成果と課題	36
◇ 研究者一覧	



発刊の言葉

「郷土を知り、持続可能な社会へ 発信できる人材の育成」

浜中町立散布小中学校 校長 大 和 洋 一

浜中町は、海と大地に恵まれ、漁業と酪農中心の1次産業の町です。自然と調和するまちづくりをモットーに、これまでラムサール湿地・北海道遺産に登録されている霧多布湿原、海岸地域は希少鳥類やラッコ等の生息、多種の貴重な植物が群生する宝庫でもあります。本校のある散布地区は、海に面した地理的条件による主要産業「漁業」により発展してきました。学校もそれに伴い開校140年の長い歴史の中、保護者や地域の願いのもと、協力を得ながら教育活動を推し進めてきた沿革があります。「地域とともにある学校」として教育理念を継承し、人材（財）の育成を担ってきました。

さて、この度の北海道教育委員会「海洋教育パイオニアスクールプログラム」の実践校として令和元年度（平成31年度）より3カ年の研究指定を受け、推進してきました。最終年度である令和3年度はテーマを「散布の海からの発信～散布を誇れる子どもの育成を目指して～」と設定し、これまでの集大成として海洋教育推進委員の先生方が中心となり、学習活動を振り返りながら、成果と課題を洗い出し、活動内容を工夫改善してきました。小中併置校の利点を生かした9年間のつながりある学びの中で、各学年段階に応じた身に付けさせたい資質能力を押さえ、教科等横断的な視点、また令和2年度には文部科学省から教育課程特例校に認可され、「散布学（海洋編）」の特色ある教育課程の編成・実施を図ってきました。

「散布学（海洋編）」のコンセプトの一つに「家庭や地域と思いや願いを共有する」、地域に根ざしたふるさと教育、地場産業を通じたキャリア教育等との関連性や融合性の大切さを実感しました。近年、町全体の漁業就業者にとって水産資源の減少、魚価の低迷、また温暖化や海面の悪化による海洋環境の変異など、厳しい経営環境の影響により従事者の減少傾向、後継者不足が大きな課題となっています。このような背景の中、地域の願いには次代を受け継ぐ人材確保、地域内外を知り、さらにグローバルな視点から郷土愛を深め、地域の良さを発信し、環境の変容に自らも変化できる人材の育成、活躍に期待を寄せています。学校と地域の課題に鑑みて具体像とは、「①海（自然・郷土）からの恩恵や変異、危機等を理解し、行動に移せる人」「②持続可能な社会のために課題解決を図り、情報を発信、共有できる人」「③自ら学びに向かい、生きる力を身に付け高められる人」、3つの指標から資質能力を思索してきました。

結びに、3カ年の研究推進を通して、児童生徒の意識や自己肯定感の高まり、万事意欲的に学びに向かう姿がみられてきたものと自負しているところです。そして、保護者や散布漁業協同組合をはじめ地域の全面的なバックアップ、また関係機関・団体等の協力により子どもたちの学びの場が広がり、幅広い取組を行うことができました。今後とも、「社会に開かれた教育課程」の理念のもと、子どもたちの実態を見取り、どのような力が必要かを見定めし、カリキュラム・マネジメントを進めていきます。



発刊に寄せて

「海と共に生きる教育」

浜中町教育委員会 教育長 佐藤 健二

海洋国である我が国にとって、海と共に生きる意識と資質・能力、そして態度を有する人材の育成は重要課題であり、海洋基本法においても海洋に関する国民の理解増進を掲げ学校教育等における海洋に関する教育の推進が謳われています。これらを踏まえた海と人との共生を目指した散布小学校の取組は大変意義深く、海洋教育パイオニアスクールプログラム実践校としての3年間のまとめとして、この度、実践記録集を発刊しますことに心からお祝い申し上げます。

さて、本校は令和元年度から3年度までの3年間、北海道教育委員会指定事業海洋教育パイオニアスクールプログラム実践校として、日本財団、東京大学海洋教育アライアンス海洋教育促進研究センター、笹川平和財団海洋政策研究所からの支援を受け、海洋教育カリキュラムの開発と海洋教育の担い手の育成に関わる活動を充実させてきました。初年次は、生活科及び総合的な学習の時間を中心として他教科の学習と関連を図り、各学年に応じた「年間プログラム」の作成・実施をされました。特に「あさり島活動」等の体験活動から問題を発見し、探究活動を行い、「地域大感謝祭」で保護者や地域の方々に学びの成果を発信され、高い評価を受けております。

2年次は、文部科学省から教育課程特例校に指定され、「散布学（海洋編）」の教育課程を編成・実施・評価・改善をされました。併せて地元漁協から講師を招き、あさりの生態、干潟の環境についての講演会の開催、更には、北海道厚岸翔洋高等学校、霧多布湿原センター、北海道教育大学釧路校、浜中町役場等の協力を得て、海洋教育と関連する教科学習の内容にかかわるカリキュラム・マネジメントを進められました。

最終年次は、これまでの活動を基本としながら「沿岸の魚介類を育む豊かな森づくり」という視点から NPO 法人シマフクロウ・エイドの協力を得て進められました。多様な生物が生きる広葉樹の森づくりの活動として散布小学校児童が植樹会に参加されました。この活動によって、これまでとは別な視点から海を捉え、多面的な思考を促す良い契機となったように考えます。

また、令和4年1月27日には、「散布の海からの発信」～散布を誇れる子どもの育成を目指して～というテーマのもと、小学校5・6年生散布学（海洋編）「散布の海の豊かさを守ろう」の授業が公開されました。事後の研究協議では、体験活動から導かれる子どもの深い学び、活動の価値の実感、地域の素晴らしさの発見等を浜中町内外に大いに発信されました。

今後も貴校には、本事業における成果を生かし、地域の海や水産資源と環境の結びつきについての理解を深めるとともに、子どもたちにとって豊かな人生の実現につながる資質・能力の育成を図っていかれますことを期待しています。

結びになりますが、大和校長をはじめとして、学校一丸となって実践に取り組んでこられた教職員の皆様に深く敬意を表し、併せて散布小中学校の益々の発展・充実を祈念いたしまして、実践記録集発刊にあたってのお祝いの言葉といたします。

本校の海洋教育に関する
グランドデザイン

1 我が国における海の重要性

(1) 地理的環境

地球上の水の97.5%を湛え、地表の7割を占める海は、生命の源であるとともに、地球全体の気候システムに大きな影響を与え、水の循環の大本として生物の生命維持の上で極めて大きな役割を担っている。

面積約447万k㎡、世界第6位の広さを誇る我が国の管轄水域(内水含む領海+排他的経済水域)には流氷から珊瑚礁までの様々な環境が見られ、沖合に広がる海域には多様な生物・エネルギー・鉱物等の天然資源が豊富に存在している。我々は、この海を資源の確保の場として利用するのはもちろんのこと、世界と交易を行う交通路として、あるいは国民の憩いの場として多面的に利用してきた。現在では総人口の約5割が沿岸部に居住し、動物性タンパクの約4割を水産物から摂取し、輸出入貨物の99%を海上輸送に依存している。

一方、平成23(2011)年3月11日の東日本大震災によって引き起こされた津波は、尊い生命と地域社会を奪い、海洋環境にも甚大な被害をもたらすなど、海の脅威を見せつける結果となった。四面を海に囲まれた我が国には、津波のみならず海に関する脅威が多数存在することを十分に認識する必要がある、これらを踏まえ海と共存しなければならない。

(出典：海洋教育政策研究財団「21世紀の海洋教育に関するグランドデザイン」)



(2) 海を取り巻く国際社会とのつながり

これまで人類は、領海外は誰もが自由に開発・利用できる「海洋の自由」の考え方の下、新たな資源の可能性を求め積極的に海に進出してきた。特に近年、科学技術の進展により行動能力が増すと、沿岸国による海域と資源の囲い込みが進行したが、一方で世界各地に海洋汚染、資源の枯渇、環境破壊を引き起こし、我々自身の生存基盤を脅かす事となった。

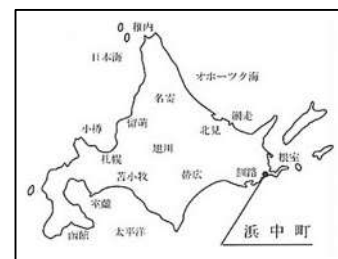
今後更に増加が予想される世界人口の必要とする水・食料・資源・エネルギーの確保や物資の円滑な輸送のためには、今後も我が国一国だけではなく、地球上の全ての国々の協力のもと、海を総合的に管理していかななくてはならない。

(出典：海洋教育政策研究財団「21世紀の海洋教育に関するグランドデザイン」)

2 本校を取り巻く環境

(1) 地理・自然

本校の所在する浜中町は、道東釧路地方の東端にあり、太平洋に面した霧多布半島は厚岸道立自然公園の一角をなしている。また、約67kmに及ぶ海岸線は砂浜・奇岩絶壁を有し、嶮暮島をはじめとする大小様々な島が点在し、内陸部の台地状平原や湿原などの美しい景観に包まれている。



南部に位置する霧多布湿原は、火散布沼、藻散布沼とあわせ「ラムサール条約登録湿地」に認定されているほか北海道遺産に選定され、その中央部は「霧多布泥炭形成植物群落」として国の天然記念物にも指定されている。また2021年3月には浜中町をはじめ釧路町、厚岸

町、標茶町の一部が「厚岸霧多布昆布森国定公園」に指定された。気象は年間平均気温 5～6℃、最高気温 20℃前後、最低気温-10℃前後と冷涼であり、春から夏にかけて沿岸部を中心に霧が発生しやすく、秋から冬は好天が続き年間雨量は 1,000mm 程度となっている。

(2) 浜中町の人口及び世帯数の推移

浜中町の人口は、昭和 35（1960）年をピークに減少傾向をたどり、令和 3 年（2021）3 月末現在では 5,548 人となっている。世帯数は、同現在 2,454 で、人口と比べて若干緩やかな減少傾向にある。1 世帯当たりの人数は 3 人を割り込み、核家族化が著しく進んでいる。

【人口等の推移】

（単位：世帯、人）

年度	世帯数	人口			1 世帯当たり人数	対前年度 (%)
		男	女	総数		
平成 29 年	2,452	2,933	3,063	5,996	2.4	97.9
平成 30 年	2,441	2,902	2,985	5,887	2.4	98.1
平成 31 年	2,439	2,863	2,933	5,796	2.4	98.5
令和 2 年	2,441	2,788	2,855	5,643	2.3	97.4
令和 3 年	2,454	2,712	2,836	5,548	2.3	95.7

〔資料：令和 3 年 3 月末現在の住民基本台帳〕

(3) 産業別就業構造

浜中町の産業別就業人口は減少傾向にあるが、第 1 次産業は全体の 50% を占め、釧路管内市町村で最も高い構成となっている。漁業就業者は水産資源の減少、魚価の低迷など厳しい経営環境の影響により、減少傾向にあり、後継者不足などが大きな課題となっている。

【産業別就業人口】

（単位：人）

区分	平成 12 年		平成 17 年		平成 22 年		平成 27 年	
	総数	構成	総数	構成	総数	構成	総数	構成
総数	4,490	100.0	4,280	100.0	4,018	100.0	3,743	100.0
第 1 次産業	2,335	52.0	2,233	52.2	2,042	50.8	1,887	50.4
漁業	1,652	36.8	1,536	35.9	1,375	34.2	1,240	33.1
農業	681	15.2	695	16.2	663	16.5	642	17.1
林業	2	0.0	2	0.0	4	0.0	5	0.1
第 2 次産業	589	13.1	594	13.9	654	16.3	613	16.4
第 3 次産業	1,566	34.9	1,453	33.9	1,322	32.9	1,243	33.2

〔資料：国勢調査〕

（出典：浜中町役場水産課「令和元年度版浜中町の水産概況」）

3 学校における海洋教育の必要性

(1) 法的根拠

平成 18（2006）年 12 月改正の教育基本法では、知・徳・体の調和のとれた発達を基本としつつ、個人の自立、他者や社会との関係、自然や環境との関係、国際社会を生きる日本人という観点から具体的な教育の目標が定められた。これに基づき新学習指導要領では、一人一人の児童生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値ある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められている。

(2) 新学習指導要領のポイント

新学習指導要領の改正のポイントは以下に示されている通りである。

一つ目は、「社会に開かれた教育課程」である。よりよい教育課程を通じてよりよい社会を作るという目標を学校と社会と共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容を明確にしなが、社会との連携・協働によってそのような学校教育の実現を図ることを目指すものである。

二つ目は、「資質・能力（三つの柱）の育成」である。実際の社会や生活で生きて働く（知識・技能）、未知の状況にも対応できる（思考・判断・表現）、学んだことを人生や社会で生かそうとする（学びに向かう力・人間性等）の育成を目指すことである。また、全ての教科等の目標及び内容についても、この三つの柱に基づいて再整理されている。

三つ目は、「カリキュラム・マネジメント」である。子供たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する学校教育目標を実現するために、教育課程に基づき組織的かつ計画的に教育課程の質の向上を図っていくことである。

四つ目は、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善である。授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、子供たちの「学び」そのものが、「アクティブ」で意味あるものとなっているかという視点から授業をよりよくしていくことである。

（出典：文部科学省「新学習指導要領のポイント」）

(3) 学習指導要領解説編と海洋教育

小学校および中学校の『学習指導要領解説編』では「現代的な諸課題に関する教科等横断的な教育内容についての参考資料」として「海洋に関する教育」が記載された。そこでは『学習指導要領総則』第2に示されている「教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成」と、第3に示されている「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」を達成するためのものとして海洋教育が記載されている。

第2-2(2) 各学校においては、児童や学校、地域の実態及び児童の発達の段階を考慮し、豊かな人生の実現や災害等を乗り越えて次代の社会を形成することに向けた現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力を、教科等横断的な視点で育成していくことができるよう、各学校の特色を生かした教育課程の編成を図るものとする。

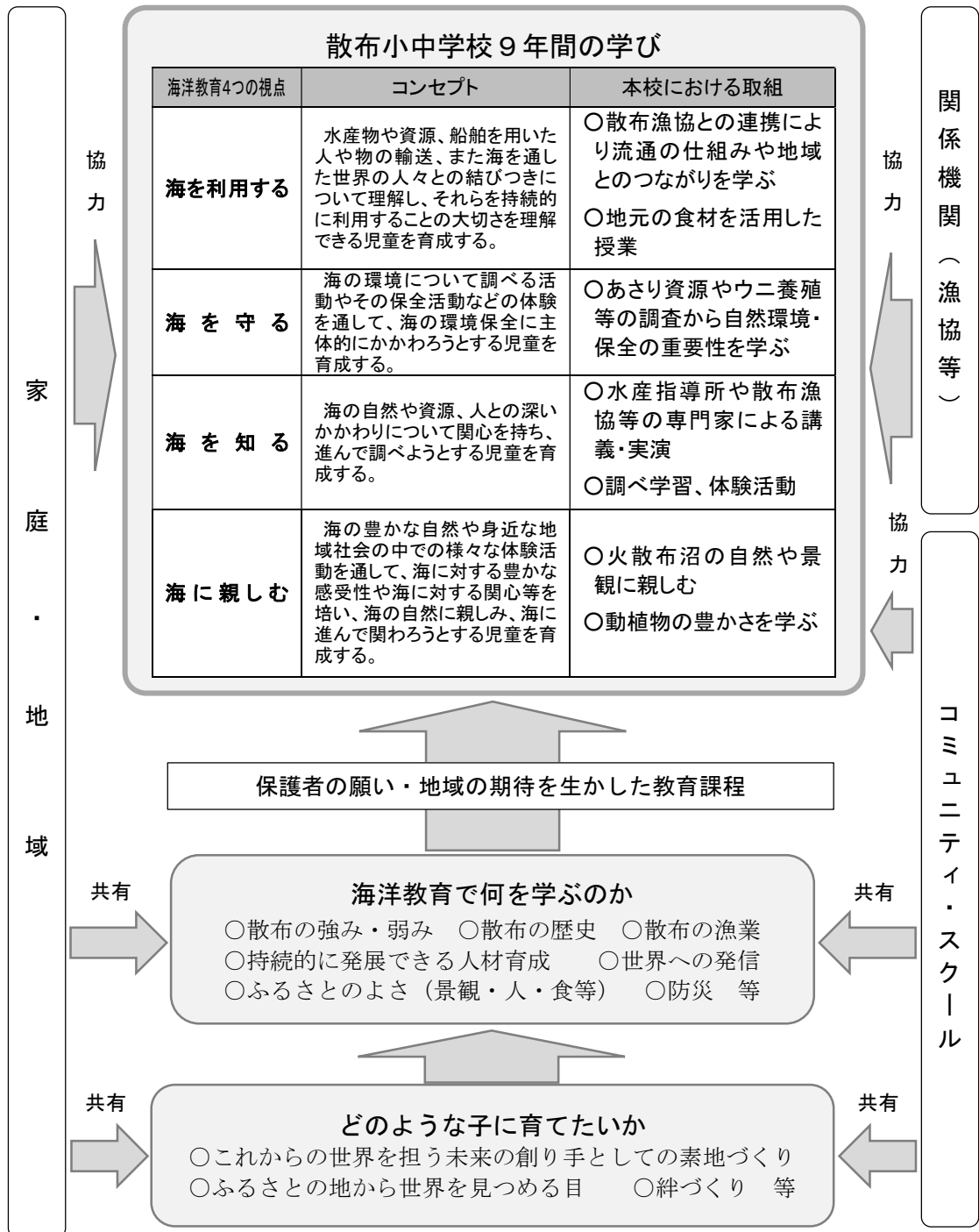
第3-1(5) 児童が生命の有限性や自然の大切さ、主体的に挑戦してみることや多様な他者と協働することの重要性などを実感しながら理解することができるよう、各教科等の特質に応じた体験活動を重視し、家庭や地域社会と連携しつつ体系的・継続的に実施できるよう工夫すること。

海洋と人類の共生を実現するためには、教科を横断した幅広い視点から考えることが必要である。また、共生のあり方には答えがないため、一人一人が自分ごととし、対話を重ねながら実現に向けて探究していくことが必要である。このように、海洋教育は、新たな時代の教育のあり方としても求められている。

(4) 本校における海洋教育「散布学（海洋編）」のコンセプト～社会に開かれた教育課程～
ア 目指すゴール

地域の海や水産業、地域の環境などについての探究活動を通して、地域の海や水産資源と環境の結びつきについて理解するとともに、地域の発展に貢献することのできる人材を育成する。

イ 具体的活動・協力体制



家庭や地域と 思いや 願いを 共有

今年度の実践

1・2年生の取組

1 はじめに

今年度、1年生（5名）、2年生（4名）は単式の学級編成となり、活動によっては合同で行ってきた。児童の家庭のほとんどが漁業に携わっている。そのため子供たちも、昆布干しを中心に家の仕事を手伝っている。海は、子供たちにとって非常に身近なものである。

1・2年生は昨年度の取組を基本に活動を見直し、活動の質の向上、内容の深化を追究し、児童の気づきを育むよう実践を心がけ進めてきた。

2 今年度の実践

(1) 生活：藻散布海岸散策（6月）

今年度は事前、事後を含め4時間、当日は3時間の活動を行った。事前・事後指導では、2年生が主体となって2グループに分かれ、活動のきまりや活動内容について話し合い、見直しをもって活動へ向かうことにつながった。

藻散布海岸学習当日では、始めに全校児童で海岸のゴミ拾いや清掃を行った。海外からの漂着物に驚く児童も見られた。その後、海辺の生き物探しを霧多布湿原センターの職員と一緒にいった。どのような場所に生き物が暮らしているか、体験を通して多くの事を学習した機会となった。



(2) 図工：「海の子作品展」制作（9月）

マリンバンク主催により毎年実施している海の子作品展に今年度も取り組んだ。1年生は「生き物いっぱい的大海」、2年生は「すてきなちりっぷの海」をテーマに作成した。

(3) シマフクロウ・エイド「豊かな海を育む森づくり」

※ 別頁参照



3 実践の成果と課題

(1) 成果

昨年度からの活動は、より内容を深化させた取組を意識することができた。また、新たな取組もあり、児童がより海に関わる環境や環境を守るために必要なことに気づき体感することができた。

(2) 課題

活動については今後も継続して行うが、活動の意図や活動のつながりをより明確にしてカリキュラムに位置づけていく必要がある。

4 次年度に向けて

教育課程での海に関わる学習の位置づけや系統性を明確にして、1・2年生段階でのおさえを確認し、児童が体験から深い学びにつながるような、海での学び等を通した内容の充実を図りたいと考える。

1 はじめに

本学級は、3年生5名、4年生1名の計6名である。今年度は、霧多布湿原ナショナルトラストの協力のもと、海辺の環境を調査したり、海と山のつながりを考えたりする「湿原学習」と、海の自然や資源、人との深い関わりについて調べる「漁業と酪農業を調べよう！」の学習を行った。そして、それら海洋教育の活動で得られた成果と課題を踏まえ、次年度以降のカリキュラム作成を目指した。

2 今年度の実践

(1) 湿原学習「海辺のゴミについて考えよう！」

期日：令和3年6月24日（木）8:45～11:45 講師：Amamo Works 代表 河内 直子氏 他2名

全校児童で海辺に打ち上がっているゴミ拾いを行った。活動を通して、ゴミのほとんどは「人工物」であることがわかり、そのことから、自分たちの暮らしと海辺の環境のつながりについて考えることができた。



その後3～6年生は海岸の奥まで進み、海の生き物を探す活動を行った。海辺に生きる様々な生き物の正式な名称や生態について、講師の方々に教えていただくことができた。

子供たちからは「海の生き物について知ることができた。」「こんなにゴミがあるとは思わなかった。」「ゴミを減らすために自分たちにできることをしていきたい。」等の感想が聞かれ、自分たちの地域や海辺の環境について考えることができた有意義な学習となった。



(2) 図工「海の子作品展」作品制作

取組期間：8～9月（4時間扱い）

海の仕事や自然環境への興味を高めることを目的に、海の子作品展（主催：マリンバンク）に今年度も取り組んだ。



(3) 散布学（海洋編）：「漁業と酪農業を調べよう！」

取組期間：令和3年8月～10月（19時間扱い）

子供たちは、身近な漁業の仕事の内容については概ね理解しているが、これらの仕事が海の恩恵を受け、環境に大きく影響を受けていることや、仕事に携わる人々の努力や苦労を理解するまでには至っていない。そこで、地域の産業や携わる人々の思いを理解し、海の自然や資源、人との深いかかわりについて進んで調べようとする意識を高めるために、本単元を計画した。



(4) 湿原学習「酪農業のことを知ろう！」

期日：令和3年8月20日（金）9:30～11:30 講師：Grateful Farm 松岡牧場 松岡 智子 氏

本校周辺は、漁業で生計を立てている方々が多く、同じ浜中町でありながら子供たちは酪農に触れる機会が少ない。そこで地域の産業についてより学びを深めるために本学習を実施した。当日は、松岡牧場においてチーズづくり体験や餌やり、施設見学などを行い、酪農業に携わる方々の思いについて学ぶことができた。事後は調べたことや体験したことをもとに新聞としてまとめ活動を行った。



(5) 漁業について調べよう！

学習活動の中で子供たちは、「散布は何漁が多いのだろう」「どんな魚が獲れるのだろう」「漁業に携わる人はどのような思いで仕事をしているのだろう」など、様々な疑問を抱いていた。その疑問を解決するために、浜中町ウニ種苗センターの見学や、インターネットを活用した調べ学習、漁業に携わるお家の方へのインタビューなど、自分達の地域を見つめ直す活動を通して疑問を解決していくことができた。

また、調査して明らかになったことをポスターや新聞にまとめ、地域大感謝祭で発表することとした。



(6) 地域大感謝祭での発表

期日：12月4日（土）

「漁業と酪農業について調べよう！」の学習の成果を、児童生徒や保護者に向けて発表した。発表では「ウニの育て方」「散布で獲れる魚の旬の時期」「酪農の仕事内容」「漁業や酪農業に携わる人々の思い」などそれぞれが学び得たものが紹介された。



3 実践の成果と課題

(1) 成果

藻散布海岸での学びを土台として、海の自然や資源、地域の産業について自ら課題意識をもち、進んで調べていくことができた。また、活動の中で「地域の産業に携わる人々の思い」にも触れることができ、より一層地域に誇りを持ち地域の発展に貢献したいという意識を高めることができた。

(2) 課題

子供たちの課題意識と探究活動によりつながりが生まれるようなカリキュラムの作成が必要と考える。海洋教育と関連を図ることができる教科をさらに整理していく必要がある。

4 次年度に向けて

今年度の取組を生かしながら、次年度は他教科の関連をさらに意識し、「子供の課題意識と探究活動のつながり」「教科横断的な視点」を意識したカリキュラムを編成・実施する。

1 はじめに

本学級は、5年生7名、6年生1名の計8名である。今年度は、海の環境を保全する活動を通して、自分たちの生活が海とつながっていることを理解し、海の自然を守ろうとする意欲を高めることをねらいとして進めてきた。また、自分たちの地域だけではなく、同じく海洋教育に取り組んでいる羅臼町の羅臼小学校と春松小学校との交流を行う中で、自分たちの学校以外にも環境問題の解決に向かって取り組んでいる学校があることを知り、学びを深めることができた。昨年度計画していたカリキュラムに加え、シマフクロウ・エイドの植樹活動や沖縄の学校との交流が行えたことにより、自分たちの地域の環境問題への意識をさらに高めることができた。

2 今年度の実践

(1) あさり島活動への参加

あさり島活動は平成22年度から散布中学校で行われている活動であり、小学生の参加は3年目を迎えた。あさり島活動への参加を通して、地域の環境保全の意識を高めることをねらいとしている。今年度は保護者の協力を得ながら、5月13日、14日の2日間実施した。



1日目は、あさりの採取及び外敵駆除を行った。あさりの外敵であるタマガイとその卵を駆除することができた。また、タマガイの卵が茶碗の形に似ていることから、「砂茶碗」と呼ばれていることを学んだ。



2日目は、1日目に引き続きあさりの採取と外敵駆除を行い、最後にはあさりの稚貝撒きも行った。この2日間のあさりの採取量は昨年度よりも100kgほど多い572kgとなった。

あさり島活動を行う中で、これからの漁業は獲るばかりではなく、育てることが大切だということも学んだ。あさりの稚貝まきを通して育てる漁業を実際に体験することができた。



あさり島活動で学んだことをきっかけに、児童は「日本全国のあさりの漁獲量はどうなっているのか」「タマガイはどのようにしてあさりを食べてしまうのか」「どうしたらあさりを増やしていくことができるのか」など様々な疑問が生まれ、それらの疑問を解決するために調べ学習を行った。



さらに、あさは水温が20℃前後で産卵することから、散布のあさはいつ産卵しているのかを調査することとした。月に一度、火散布沼の水温調査を行い、8月の水温が19℃前後だったことから、散布のあさは8月頃に産卵しているという予想も生まれた。

(2) 藻散布海岸学習

6月24日に全校児童で藻散布海岸に行き、5・6年生は3・4年生と一緒に清掃活動と海辺

の生き物調査を行った。

清掃活動では、拾ったゴミを「自然のもの」と「人工物」に分別し、ゴミのほとんどが「人工物」であることに気付くことができた。それらのゴミを少しでも減らすためにできることを「散小エコ宣言」としてまとめ、日常生活の中で意識しながら生活を送ることができるように各教室に掲示している。



また、海岸には海外からのゴミも流れ着いていた。反対に、日本のゴミが海外へ流れ着いていることも学び、全世界の海が繋がっていることを実感する機会となった。霧多布湿原センターの職員から、「2050年には海の生き物よりもゴミの量の方が多くなってしまう」という話を聞き、環境問題への意識を高めるきっかけの活動となった。



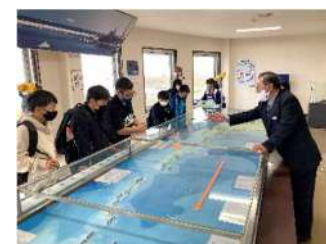
(3) 図工「海の子作品」作品制作

海への興味関心を高めるために取り組んでいる活動である。本学級は、5月に行われた「あさり島活動」を題材にして取り組んだ。あさりを採取している場面やあさりの稚貝を撒いている場面を描く姿が見られた。



(4) 北方領土学習

10月1日に実施した北方領土学習では、児童から出た「日本とロシアの問題なのはわかるけれど、どうして解決していないのか」という疑問を解決するために、根室市の北方四島交流センター(ニ・ホ・ロ)や納沙布岬を訪れた。北方領土に住んでいた方の話を聞いたり、納沙布岬から海を見たりすることで領海の意味を確かめたり、これまでの歴史の変遷を学び、北方領土への学びを深めた。



(5) 修学旅行

修学旅行の2日目の11月10日に、羅臼小学校と春松小学校の3校で海洋教育実践交流会を行った。

児童が発表したことは、「このままでは2050年には魚よりもゴミの量が多くなる、という事実をたくさんの人に知ってほしい」、「ゴミを減らすためにたくさんの人たちに呼びかけ、ゴミ拾いをする機会を作りたい」、「みんなで植樹をする機会を作って豊かな森を作りたい。そして海の環境をよくしたい」という内容であった。



羅臼小学校は、廃油を再利用して石鹼を作ること、羅臼町の魅力をインスタグラムで発信していることを発表していた。春松小学校は、小中高で一斉にゴミ拾いを行う取組や、ユネスコスクールの取組について発表していた。2校の実践を参考に、自分たちの地域のためにできることを再考する機会となった。



(6) 海洋教育パイオニアスクール全道成果発表会への参加

10月29日、札幌市において上記の発表会が行われた。本校は、新型コロナウイルス感染症対策のため Zoom での参加となった。「地球を守るために自分たちができること」をテーマに、昨年度の取組や今年度の「あさり島活動」と「散布の海の豊かさを守るための取組」について発表した。



(7) 海の専門家による講話

12月2日、これまでの海洋学習で生じた様々な疑問を海の専門家に解説してもらい「散布の海の豊かさを守ろう」を実施した。当日は、北大臨海実験所の仲岡雅裕所長と Amamo Works (アマモークス) 河内直子代表を招き、「散布の昆布はなくなってしまうのか」「海水温はこれからも上がってしまうのか」「地域を守るために行った方がよい活動は何か」などの質問に答えていただいた。



児童が驚いたことは、地球温暖化の対策をせずに過ごしていると、海水温が上昇し、散布の昆布は 2090 年には獲れなくなってしまうという研究データであった。この事実を多くの人に知ってもらい、地球温暖化への対策をしていく必要があることを学んだ。



河内さんからのメッセージ

ごみを拾うことは意味がありますが、ごみを捨てる人がいる限り終わりがありません。ごみを捨てる人を減らし、そもそも出てくるごみの量を減らすことを考える必要があります。ゴミ箱を増やせば海に流れるごみは減るかもしれませんが、気軽に捨てる人は増えるかもしれません。どの家でも環境保全につながる活動はたくさんあります。まずは家族で話をしてみましょう。プラスチックごみを減らすこと、環境に配慮した洗剤を使うことなど、できることはたくさんあります。今日お話ししたように、人間の活動が自然の生きものの数や分布にさまざまに影響しています。個人でできることと、社会で取り組まなくてはいけないことがあります。みんなで話し合い、何ができるかを考え、伝えていってください。



(8) 地域大感謝祭での発表

12月4日、自分たちが町に提案したいことを保護者の方々に聞いていただき、それに対する意見をいただいた。今後、自分たちが町に提案するときの内容を考えるときに参考になる資料となった。子供たちは自分たちの意見だけではなく、保護者の意見も参考にしながら、町に提案する内容考えることができた。



保護者の声

地域みんなでゴミ拾いをすることに賛成です。学期ごとに行ったり、月に1度行ったりしてもよいと思います。みんなでよりよい散布にいきましょう。



(9) 沖縄の学校との Zoom 交流

12月15日、本校と同じ海洋教育に取り組む沖縄県西表島の竹富町立船浦中学校の生徒と Zoom 交流を実施した。

児童は6月に行った藻散布海岸の清掃活動を通して「海岸に多くのゴミが流れ着いている」ことを学習している。そして、船浦中学校がある西表島にもたくさんのゴミが流れ着いていることや、それらを解決するために、中学生全員で海辺を清掃する「ビーチクリーン」を行っていることも学んだ。また、海水温が上がっているため、サンゴが減少していることが問題となっていることも学ぶことができた。これらの事実を知った本校の児童は、「海水温が上がって困るのはこの地域だけではない」「こんなに距離が離れているのに同じような課題を抱えている」と自分たちの地域との共通点や相違点について考えていた。



3 実践の成果と課題

(1) 成果

本校の海洋教育の目指すゴールは、「地域の海や水産業、地域の環境などについての探究活を通して、地域の海や水産資源と環境の結びつきについて理解するとともに、地域の発展に貢献することができる人材を育成する」ことである。今年度は、藻散布海岸の清掃活動、あさり島活動、シマフクロウ・エイドとの植樹活動、海洋教育実践交流会、海の専門家の講話、沖縄の学校との交流、地域大感謝祭など、様々な活動を通して、児童が地域の発展に貢献しようとする姿に迫ることができた。体験活動が多かったが、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」という学びのスパイラルを意識しながら進めることができた。

シマフクロウ・エイドの活動や沖縄の学校との交流は、当初から予定されていた活動ではなかったが、海洋教育の目指すゴールに向かって柔軟に単元計画を変えていくことができた。

(2) 課題

次年度は、海洋教育の内容を総合的な学習に組み替えられるよう見直しを図り、2年1巡できるよう学年や発達段階を考慮し、児童の課題意識と探究活動の推進を支えていくカリキュラムの作成が必要である。また、他校との交流も継続して行っていくべきである。

4 次年度に向けて

課題にも記述したとおり、2年1巡で行えるカリキュラムの実践と検証・見直しを行う。今年度で海洋教育パイオニアスクールプログラムが終了となるため、総合的な学習に組み替えられるよう、他教科の関連も整理し教育課程に位置づけていく必要がある。

1 はじめに

あさり島活動は、平成22年度に散布漁業協同組合より「学校専用のあさり島」を提供いただき、中学校生徒を対象に、あさりの生態、干潟の環境、蝕害生物、散布のあさり漁・昆布漁に関する学習やあさり掘り体験等を行ってきた。平成30年度までは、あさり買付けで得た益金を元に、釧路市動物園へ顔出しパネルの寄贈や町内施設への車椅子寄贈、北海道盲導犬協会への寄附など、社会貢献を中心に活動を行ってきた。

平成31年度からは、あさり掘り体験に加え、地域に寄贈・寄附する活動から「発信」をテーマに地域の魅力や良さをアピールする活動へと移行してきた。

2 今年度の実践

(1) 事前学習①：散布・SDGs についての学習会

日時：令和3年4月30日（金）13:05～13:50

場所：散布小中学校 体育館

内容：地域域活性・発信・環境維持の必要性について学習した。



(2) あさりの生態学習会（事前学習②）

日時：令和3年5月7日（金）13:05～13:50

場所：散布小中学校 体育館

講師：散布漁業協同組合総務指導課長 西田 善行 氏
釧路地区水産技術普及指導所普及指導員 田村 亮輔 氏
〃 普及職員 朝倉 健 氏

内容：3名の講師を招き、「あさりの干潟について」と題し講演をいただいた。



(3) 事前学習③：オリエンテーション

日時：令和2年5月10日（火）11:30～12:05

場所：散布小中学校 体育館

内容：活動内容の確認、目標設定を行った。



(4) あさり掘り活動①

日時：令和3年5月13日（木）8:30～12:05

場所：火散布沼・あさり島

内容：小学5・6年生、中学生、教職員、保護者であさり島へ向かい、あさりの採取を行った。保護者の協力のもと、選別や外敵駆除にも取り組んだ。今年度の収穫量は572kgで、中学校3年生8名と教員で散布漁協市場への出荷も体験することができた。



(5) あさり掘り活動②

日時：令和3年5月14日（金）9：30～12：05

場所：火散布沼・あさり島

内容：小学5・6年生、中学生、教職員、保護者であさりの稚貝撒きを行った。火散布沼の波打ち際で稚貝を採取した後、あさり島に渡って手作業で干潟を耕し、稚貝を埋めていった。



(6) 事後学習①：活動の反省、発信方法についての学習

日時：令和3年5月24日（月）13：05～13：50

場所：散布小中学校 体育館

内容：あさり島活動の反省の後、地域に合った発信方法について学習した。



(7) まとめ学習・資料作成

日時：令和3年6月22日（金）～

場所：散布小中学校

内容：中学生が3班に分かれて文化祭に向けてそれぞれの発信準備を行った。1班は、あさり島活動に関すること、あさり島の歴史をまとめたプレゼンテーション発表、2班は地域をPRする動画作成、3班は配布物（クリアファイル、マスク、トートバック）を作成した。



3 実践の成果と課題

(1) 成果

あさり島活動を通して、地域資源の大切さを再確認するとともに、地域の海洋と漁業について学ぶことで、自分たちの暮らす地域の良さを再認識することができた。また、中学2年生が小学校5・6年生教室へ出向き、あさり掘りや外敵駆除のコツを教えるなど、小中の垣根を越えて活動に取り組むことができた。

(2) 課題

事前学習とあさり採取活動は小学生を交えて活動することができた。これからも小中が連携できる活動や機会を創出していきたい。

4 次年度に向けて

事前学習では、児童生徒と散布の「強み」を共有することができた。今後は地域の「弱み」にも焦点を当てて、解決すべき課題を明らかにし、地域の活性化に力を入れていきたい。

1 はじめに

道有林の無計画な伐採等により浜中町の家や湖沼（特に火散布沼）への土砂流入が続き、漁業被害が深刻になっていたことから、令和3年3月22日、魚を主食とするシマフクロウの森を守る活動に取り組むNPO 法人シマフクロウ・エイド、浜中町、散布漁業協同組合、浜中漁業協同組、北海道の5者で「浜中町 森里海をつなぐ シマフクロウ地球の森」を締結した。

協定内容には学校との連携も含まれており、今年度は各者との協働で、海と山のつながりや漁業・林業への関心を高めることをねらいとして次のような取組を行った。

2 今年度の実践

期日:令和3年10月27日(水)8:50~12:00 講師:NPO 法人シマフクロウ・エイド代表理事 菅野 正巳氏 他

(1) 植樹活動

火散布沼奥の道有林に設置された植樹場所へ移動し、広葉樹の苗木を植える作業を行った。参加者はミズナラやオニグルミなど40種類の苗木計80本を5つのグループに分かれて植樹した。植樹後は周辺の沢沿いを散策し、広葉樹がもつ働きやその大きさを実感しながら、森と海の間がりについて学んだ。



(2) 種植え活動

植樹後学校に戻り、苗木のもととなる種を植える活動を行った。子供たち一人一人がポットに腐葉土を入れ、ドングリやミズナラ、ハンノキなど5種類の種をそれぞれ種類別に植えていく作業を行った。植えた種はシマフクロウ・エイドが保管し、次年度の植樹活動に向けて育てていく。



児童の振り返り

- ・「楽しかった。自分が植えた苗が成長した姿を見に行きたい」
- ・「豊かな海をつくるためには森づくりがとても大事だということが分かった。」



3 実践の成果と課題

(1) 成果

子供と大人が触れ合いを深めながら、持続可能な漁業のための森づくりに親しみ、その役割について理解を深めることができた。

(2) 課題

植樹後の苗木の経過観察など、海と森の間がりを学ぶ活動として継続させていくために次年度以降の活動を検討していく必要がある。

4 次年度に向けて

児童が森づくり活動での学びを蓄積し今後の学習につなげていくために、次年度も児童が森づくり活動に関わるカリキュラムを整えていきたい。

1 はじめに

地域大感謝祭は、保護者や地域の方々へ日頃の感謝の気持ちを表す取組を通して、児童生徒の地域への理解やふるさとを愛する気持ちを深めること、また、海洋教育で学習した成果の発表活動を通して発信力を高めることなどを目的とした行事である。コロナ禍で食事の提供や地域住民の参加は昨年度同様断念したが、「地域を学び、地域を愛し、地域をよりよくする方策を考える姿」や「生き生きと学び発表する姿」を保護者に見てもらうことができた。

2 今年度の実践

期日：令和3年12月4日（土）9：20～11：30

(1) 小学校の取組

1、2年生は各教室で模擬店「作ってあそぼう昔あそびランド」「おまつりランド」を出店した。3・4年生は、『浜中の魅力を伝えよう』（漁業と酪農業について）で手書きポスターとICT機器を用いた発表を行った。

5・6年生は、『地球を守るために自分たちができること』（海洋教育成果交流）」と題し、自分たちのアイデアを町に提案する活動に向けて保護者に意見をもらった。

保護者の声

- ・素晴らしい発表で学校外や色んな所で発表できる場があるといいなと思います。
- ・3・4年生の酪農の勉強とか色々な職種の体験ができる機会があればいいなと思いました。
- ・高学年の子供達はさすがですね！私も勉強になるような全国のアサリの漁獲量と北海道とを比べたりして、アサリを扱っている水産会社としてもとても勉強になりました。



(2) 中学校の取組

2班に分かれ、アサリをつかったクラフト体験（ハーバリウム、ランプシェード作り）を行った。計画から当日の運営まで、生徒が自主的に活動した。

保護者の声

- ・アサリのランプシェードやハーバリウム作りは小1でも作ることができてとても楽しそうだった。
- ・遊びや物作りコーナーに人が殺到してしまうと、「一生懸命発表しているところにお客さんがいなくなり」もったいない！」と思いましたが、どの学年もすばらしかったです！



3 実践の成果と課題

(1) 成果

児童生徒が発表にやりがいや達成感をもっており、発表後は参加者の反応を受け止め、次に生かそうとしていた。小学生は上級生の姿を見本に来年の目標をもつことができた。中学生は、地元の物を使ったアイデアや、親子で楽しめる時間、作ったものを思い出の品にできる点が参加者に好評で、手ごたえを感じる事ができた。年々児童生徒の発信力が高まっている。



児童生徒の声

- ・3年生になる前は、自然や漁業が大切だということが分からなかった。3年生で初めて大事ということが分かりました。(来年は) パワーポイントで浜中の魅力などを発表したいです。(小3)
- ・たくさんお客さんが来てくれてうれしかった。何回も来てくれたお客さんがいた。来年は発表をしてみたいです。(小2)
- ・たくさんの人に散布の海洋教育のことを知ってもらいたいと思った。(中1)



(2) 課題

昨年度から密を避けるため、各発表時間をずらして行っている。その分、児童生徒は全部の出し物を見られない、保護者は自分の子供以外も見たいが時間がないという状況が生じている。また、「祭り」を楽しむために参加している保護者と、学習内容や子供の成長を確かめる「成果発表の場」として参加する保護者で感想の二極化が見られた。



4 次年度に向けて

コロナ禍で、2年連続地域の方と交流ができていないため、多くは集まれなくても地域とのつながりをもてるよう工夫したい。コロナの感染リスクに留意しながら、参加者全員が同時に同じ発表を聞き、学びを共有し、地域への共通理解を深める時間を設けていきたい。



また、発表以外にも短時間で誰でも楽しめるものや学べるものを発信できる工夫が必要。体験活動には、地域人材の協力を得て実施できるものを検討する。発表で学んだことや出たアイデアを次年度につなげ、地域連携、小中連携、「発信」の動機付けにしたい。

公開研究会

1 はじめに

最終年度の研究成果を広めるとともに、参加者からのフィードバックによって今後の方向性の修正を図ることを目的に、公開研究会を開催した。テーマを「散布の海からの発信～散布を誇れる子どもの育成を目指して～」と定め、授業公開のほか本校の研究に関する説明や研究協議を行った。

2 日時 令和4年1月27日（木）13:30～16:00

3 時程

13:15	13:30	13:55	14:40	14:50	15:50	16:00
受付	説明 本校の海洋教育の取組について	授業公開 小5・6年 散布学（海洋編） 「散布の海の豊かさを守ろう」 授業者：教諭 常陸 勇馬	休憩		研究協議 子どもに深い学びを促す海洋教育の実践について	閉会



4 参加者 34名

5 参加者の感想～抜粋～

(1) 説明（本校の海洋教育の取組について）について

- 学校が小さいことを全く思わない非常に充実したカリキュラムだと思います。産・学・官・民連携システムもしっかりしていると感じます。本カリキュラムはインプットだけでなく発信までの一貫した流れが重視されており、意味のある学びにつながっていると感じます。プロジェクトが終わっても将来にわたって未永く続けてもらいたいと思いました。
- 海洋教育について、今までよく知りませんでした。今回参加させていただき、素晴らしい取組だと感じました。地域の方の協力もよく分かりました。



(2) 授業公開〔小5・6年散布学（海洋編）〕について

- 子供たちが皆積極的に授業に参加しているのが印象的だった。授業内容についても、みんなが理解した上で進めているのが良かった。
- 子供たちが主体的に取り組んでいる姿がとても素晴らしかったです。国語の学習を関連付けた発言があり、普段から教科間の関連を図っているのだなと思いました。
- もっと子供の活動あふれる授業の可能性が見えた。改めて課題設定と教師の関わり(説明)について反省し、次につなげてほしいと思う。



(3) 研究協議（子供に深い学びを促す海洋教育の実践）について

- 熱心なグループ活動ができました。KJ法は意見を言いやすく盛り上がりやすい。話し合ううちに、思いもよらない視点や疑問などができて、楽しく話し合えました。地域愛というものについて改めて考えることができました。
- 様々な業種の方々とざっくばらんな意見交換ができてよかった。授業に関する意見もたくさん出たので、今後の授業の参考になればよいと思う。
- 地域学習について、改めて深く考えられました。大変勉強になりましたが、欲を言えばもっと時間がほしいと思いました。



(4) その他、感じたことや気付いたこと

- 本校の3年間の海洋教育の足跡を改めて実感しました。今後はこの取組をどう系統立てていくか整理が必要ですが、散布らしい地域に根差す教育課程を創り出すことができたように思います。
- 散布小の児童の様子、実際に現場で見たかったです。「散布学」とても素晴らしい学習だと思いました。ありがとうございました。
- Zoomでの実施としては、とてもよい公開研だったと思います。



散布学（海洋編） 学習指導案

日 時：令和4年1月27日（木）5校時

児 童：第5学年 7名

第6学年 1名

場 所：第5・6学年教室

授業者：常陸 勇馬

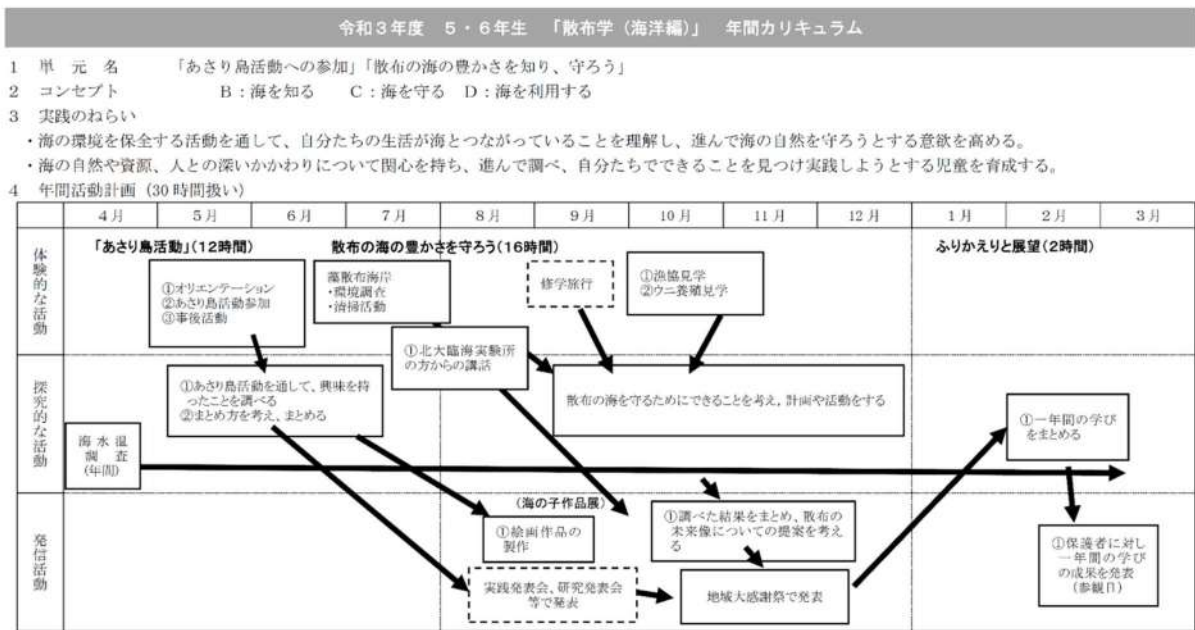
1 単元名 「散布の海の豊かさを守ろう」

2 単元の目標

- ・海を環境を保全する活動を通して、自分たちの生活が海とつながっていることを理解し、進んで海を自然を守ろうとする意欲を高める。
- ・海を自然や資源、人との深いかかわりについて関心を持ち、進んで調べ、自分たちでできることを見つけ実践しようとする児童を育成する。

3 単元の概要

(1) 年間カリキュラムでの位置付け



(2) 児童の実態

6月の藻散布海岸の清掃活動、10月の植樹体験活動、11月の2校との海洋教育実践交流会、12月の地域大感謝祭、沖縄の学校との環境問題についての交流を通し、地域の環境問題に対しての意識が高まり、自分たちが地域のためにできることを考えている。しかし、自分が提案したいことはあっても、どうしてそれを提案したいのかという根拠をこれまでの学習と関連付けて考えるまでに至っていない。本時では、自分の意見の根拠を明確にさせ、町への提案内容について考えさせていきたい。

(3) 指導観

第1小単元「体験しよう」では、藻散布海岸の学習で、海辺には人工物のゴミが多いことや海外のゴミが流れ着いていることに気付くことができた。また、霧多布湿原センターの職員から、「2050年には魚よりもゴミの量の方が多くなる」という話を聞き、「そうなる前に自分たちにできることはないか」という意識が高まった。この時期から、「あさりの漁獲量には海水温が関係しているかもしれない」と予想し、月に1度、火散布沼の海水温を調査する活動を始めた。現在では、8月の水温が19℃だったことから、「散布のあさは8月頃に産卵している」と予想し調査を進めている。環境問題や地域の環境保全に対する意識を高める取り組みとなった。

第2小単元「他校に発表しよう」では、11月10日(水)に羅臼小学校、春松小学校との海洋教育成果交流会を行った。自分たちの地域を守るためにできることを考え、以下の3つについて発表してきた。

- ①このままでは2050年には魚よりもゴミの量が多くなる、という事実をたくさんの人に知ってほしい。
- ②ゴミを減らすためにたくさんの人たちに呼びかけ、ゴミ拾いをする機会を作りたい。
- ③みんなで植樹をする機会を作って豊かな森を作りたい！海の環境をよくしたい。

羅臼小学校は、廃油を再利用して石鹸を作ることや地域の魅力を発信するためにInstagramを活用していた。春松小学校は、小中高一斉のゴミ拾いやユネスコスクールで環境保全についての発表をしていた。2校の実践を参考に、自分たちが取り組みたいことを考える機会となった。

第3小単元「海の専門家に聞こう」では、2名の講師に来校していただき、地球温暖化がもたらす影響や今後の散布の漁業について講話いただいた。このまま環境問題に対して対策を行わないとすると、2090年には散布の昆布がなくなってしまうという話を聞き、地域の環境問題についての意識をさらに高めることができた。

第4小単元「地域大感謝祭で発信」では、自分たちが町に提案したいことを保護者の方々に聞いていただき、提案内容が妥当かどうかを1～4の点数で示していただいた。その平均値や記述していただいた意見を参考にすることで、自分たちの意見だけではなく、保護者の意見も取り入れながら町に提案する内容を考えることができた。

第5小単元「提案内容を考えよう」では、これまでに調べたことや体験したこと、話し合ったりしたことをもとに、自分の意見の根拠を明確にしながら町に提案する内容を考えていくことをねらいとしている。

(4) 本校における海洋教育「散布学(海洋編)」のコンセプト～社会に開かれた教育課程～

目指すゴール

地域の海や水産業、地域の環境などについての探究活動を通して、地域の海や水産資源と環境の結び付きについて理解するとともに、地域の発展に貢献することができる人材を育成する。

4 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考力・判断力・表現力等	ウ 学びに向かう力・人間性等
自分たちの地域と海とのつながりを理解し、未来の散布の町づくりについて提案するための課題を見いだしている。	調べたことや考えたことをまとめ、相手にわかりやすくすることを通して町づくりについて考えている。	自分が散布の発展にどのように関わって生きていくのかについて考え、実践しようとしている。

5 単元計画（全18時間）

時	学 習 活 動	○指導上の留意点 △教科との関連 □評価
3	○第1小単元「体験しよう」 ・藻散布海岸の清掃活動や生き物調査を行う中で、地域の現状を確かめる。 ・あさりの生態を調べるために火散布沼の海水温調査を始める。	○地域の自然環境の問題について考えられるよう本やインターネットも活用する。 □体験的活動を通して、地域の自然環境の問題を発見し、課題を見つけようとしている。(ア)
4	○第2小単元「他校に発信しよう」 羅臼小学校、春松小学校に発信！ ・自分たちが町に提案したいことを発表する。他校の実践から自分たちの取り組みに生かせそうなことを考える。	○自分たちの発表を大切にしながらも、他校の実践から自分たちの取り組みに生かせそうなことを考える。 △修学旅行（行事） □提案の実現方法を具体的に発表し、実現への意欲を高めようとしている。(ウ)
2	○第3小単元「海の専門家に聞こう」 ・日本全体や自分たち地域の現状を知る。これまでの学習を通して感じてきた疑問について質問する。	○海について研究している専門家から助言をいただき、提案の実現に向けて意欲を高めることができるようにする。 □これまでの学習を踏まえ、海の専門家との対話を通じて、これからの散布の環境について考えている。(イ)
3	○第4小単元「地域大感謝祭で発信」 ・自分たちの考えについて保護者の方々から意見をいただき、考えをさらに深めていく。	○保護者の方々から発表に対する感想や助言をいただき、自分たちの提案を改善できるようにする。 □これまでの探求をもとに、地域に提案したいことを考え表現している。(イ)
1	○沖縄の環境問題とは？ ・西表島の船浦中学校との交流を通し、お互いの課題意識やこれまでの取り組みについて知る。	○散布と西表島の環境問題を比較し、共通点や相違点について考える。地理的条件は異なっても、環境問題に対しての意識や取り組みが同じであることに気付く。 □自分たちの地域と沖縄の環境を比較することを通して、環境問題についての理解を深めている。(ア)
3	○第5小単元「提案内容を考えよう」 ・これまでに調べたことや体験したこと、話し合ったりしたことをもとに、自分の意見の根拠を明確にしながら町に提案する内容を考える。	○自分の意見が伝わるように、根拠を明確にしながら考えをまとめさせる。 △国語科「意見文を書こう」 □自分の意見と根拠を明確にしながら、町に提案する内容を考えようとしている。(イ)
2	○地域に提案しよう」 ・散布の海を守るために自分たちができることを町に提案する。	○自分たちの意見が聞き手に伝わるようにPowerPointの資料を使って発表する □地域の発展に自分がどのように関わっていくか考え、実践しようとする意欲を高めようとしている。(ウ)

6 本時について

(1) 授業者の主張点

本校の海洋教育のゴールは、「地域の発展に貢献することができる人材を育成する」ことである。そのため、単元のゴールを「自分たちの地域の環境を守るための取り組みを考え、町に提案する」と設定した。

単元の初めは、町に提案したいことを考えても、自分たちだけで話し合った意見であったため、その考えが本当に地域の実態に合っているのかは定かではなかった。しかし、羅臼での海洋教育の実践交流や、海の専門家の講話、保護者の方々の意見を聞く中で、地域のためにどのような取り組みを提案すればよいのかが少しずつ見えてきている。本時では、自分の意見だけではなく、「海洋教育実践交流」「海の専門家の講話」「保護者の意見」を参考に、自分が町に提案したい内容の根拠を明らかにしながら発表させたい。

(2) 本時の目標

自分の意見と根拠を明確にしながら、町に提案する内容を考えている。(思・判・表)

(3) 本時の展開案 (14 / 18)

	児童の学習活動	教師の働きかけ・評価	留意点
導 7 分	1、前時までの活動を振り返り、本時の活動の見通しをもつ。 ・根拠がなければ説得力がないと思う。 ・それだけ伝えても納得してもらえない。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">相手が納得できる提案資料にするために必要なことは何だろう？</div> ・根拠を示すと説得力があると思うな。	1、不十分な提案資料を提示し、なぜ意見の根拠が必要なのに気付かせる。	・ゴールのイメージができない場合は例を示す。
展 2 分	2、個人思考 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">羅臼、春松小学校との交流から</div> ・小中と地域で一斉にゴミ拾いするのはいいな。 ・再利用の考えは大切だと思う。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">海の専門家の意見</div> ・2090年の昆布の話を知ってもらおうべきだ。 ・みんなで取り組んでいく大切さを伝えたいな。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">保護者の意見</div> ・ゴミ拾いは賛成が多いから取り組もうかな。 ・ゴミ箱の設置については賛成が少ない。 <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">沖縄との比較</div> ・海のゴミの問題は散布だけの問題ではない。 ・同じ悩みをもっているから意見の根拠にできる。 3、集団思考 ・根拠を示しながら自分の意見を述べる。 ・わたしは〇〇がいいと思う。なぜなら、この資料にもあるように、□□だからです。だから、町に提案するのは〇〇がいいと思う。 4、まとめる 自分たちの意見として伝えることを整理する。	2、自分の意見とその根拠になる資料を選ばせる。 ・自分が町に提案したいことは？その意見の説得力を高められる資料はどれかな？ 3、それぞれの意見と根拠が妥当かどうか検討させる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">評 自分の意見と根拠を明確にしながら考えている。 ※ワークシート、発言</div>	・個人思考の中で、自分の意見と根拠の整合性がとれているかを確認させる。 ・根拠として用いている資料が妥当ではない場合、グループで資料を検討する。
結 分	5、振り返りをして、次時の見通しをもつ。 ・自分の考えに根拠をもつことができた。 ・いろいろな意見を参考に考えを深められた。 ・町への提案の資料づくりを始めたい。	4、振り返りを行う。 ・次時から発表資料の作成をしていくことを伝える。	

今年度の年間カリキュラム

「散布学（海洋編）」の年間カリキュラムについて

昨年度までの各学級の実践をもとに、子供たちに必要な学びを精査し、今年度の「散布学（海洋編）」の年間カリキュラムを作成した。

なお、各学年の学習コンセプトについては、海洋政策研究財団発行の「21世紀の海洋教育に関するグランドデザイン（小学校編）～海洋教育に関するカリキュラムと単元計画～」を参考とした。

1 各学年で取り組むテーマ

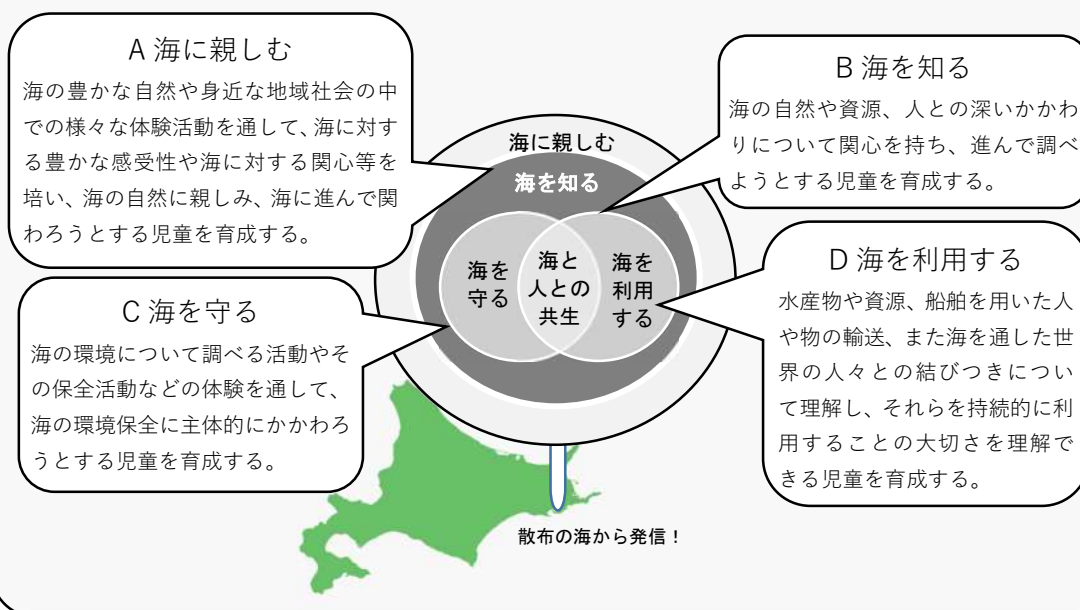
学 年	1・2年	3・4年	5・6年
テーマ	1年生 ○きせつとなかよし はる なつ ○きせつとなかよし あき 2年生 ○めざせ 生きものはかせ	○海と山のつながり ○散布の海の仕事を調べよう	○あさりの生態を調べよう ○私たちの海を守ろう
備考	主に生活科で実施	特例教育課程 「散布学（海洋編）」	特例教育課程 「散布学（海洋編）」

2 学習コンセプト（「海洋教育4つの視点」より）

学 年	1・2年	3・4年	5・6年
コンセプト	A 海に親しむ B 海を知る	A 海に親しむ B 海を知る C 海を守る	B 海を知る C 海を守る D 海を利用する

参考：「小学校における海洋教育のコンセプト」

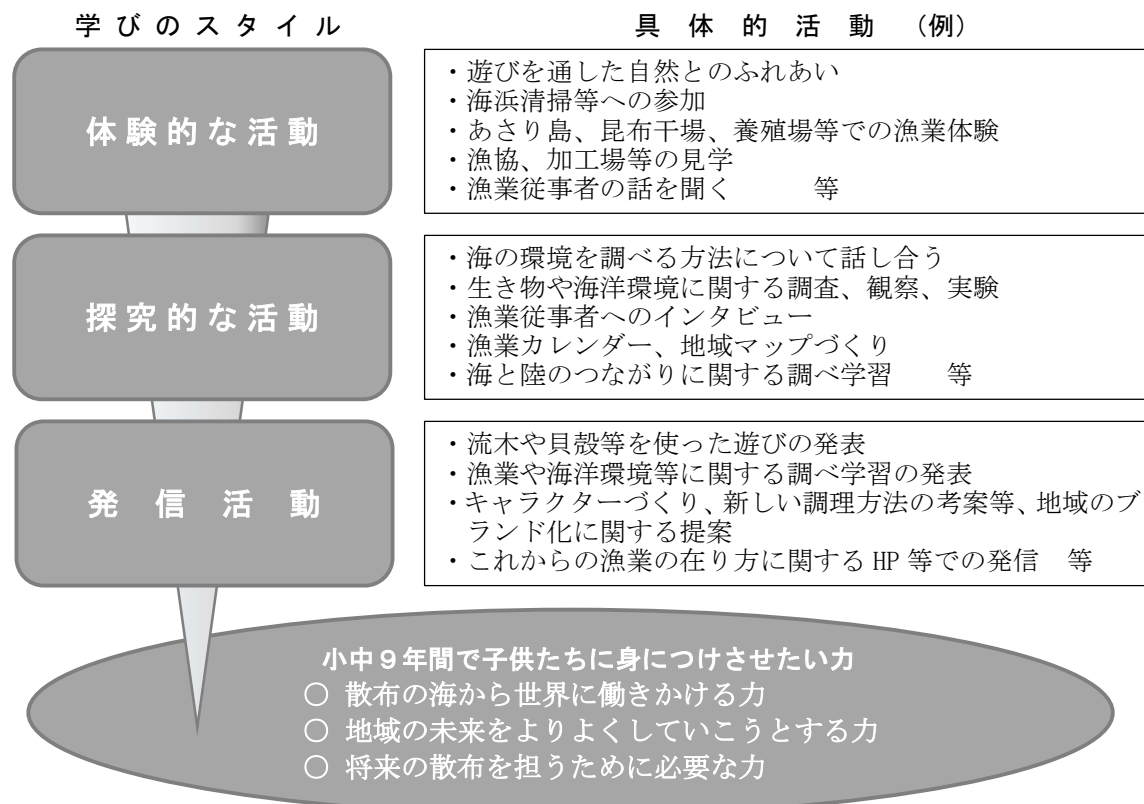
～海洋政策研究財団「21世紀の海洋教育に関するグランドデザイン」より～



3 学びのスタイル

本校で研究を進めている子供たちに身に付けさせたい力「社会人基礎力」(※下記参照)と照らし合わせ、「散布学(海洋編)」の学びのスタイルを、大きく次の3段階に設定した。

なお、この学びのスタイルは、実践を通しながら随時修正を進めていくものとする。



■ 参考資料(社会人基礎力)

経済産業省が主催した有識者会議により、職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要や基礎的な力を「社会人基礎力(=3つの能力・12の要素)」として定義した。

前に踏み出す力(アクション)

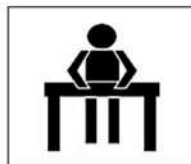
～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～



- 主体性
物事に進んで取り組む力
- 働きかけ力
他人に働きかけ巻き込む力
- 実行力
目的を設定し確実に行動する力

考え抜く力(シンキング)

～疑問を持ち、考え抜く力～



- 課題発見力
現状を分析し目的や課題を明らかにする力
- 計画力
課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
- 創造力
新しい価値を生み出す力

チームで働く力(チームワーク)

～多様な人々とともに、目標に向けて協力する力～



- 発信力
自分の意見をわかりやすく伝える力
- 傾聴力
相手の意見を丁寧に聴く力
- 柔軟性
意見の違いや立場の違いを理解する力
- 状況把握力
自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
- 規律性
社会のルールや人との約束を守る力
- ストレスコントロール力
ストレスの発生源に対応する力

令和3年度 1年生 生活科「散布学（海洋編）」 年間カリキュラム

- 1 単元名 「きせつと なかよし はる なつ」「きせつと なかよし あき」
- 2 コンセプト A：海に親しむ B：海を知る
- 3 実践のねらい
 - ・春、夏、秋の自然を諸感覚を使って観察したり、自然物を使って遊んだりする活動を通して、それぞれの季節の特徴や他の季節との違いを見付け、それらを使って遊ぶ方法を考えたり、遊びを楽しんだり工夫したりすることができるようにする。
 - ・自然や生活の様子の変化、自然の面白さや不思議さ、海岸、公園のルールやマナーを守って遊ぶことなどについて気付き、季節を取り入れて遊びや生活を楽しむ創り出すことができるようにする。

4 年間活動計画 (21時間扱い)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
体験的な活動	きせつと なかよし はる なつ(10時間)											
探究的な活動	きせつと なかよし あき(11時間)											
発信活動	(海の子作品展)											

①友達と一緒に海岸の生きものなどふれ合ったりしながら、楽しく遊ぶ。
②晴れた日に、水遊びや、砂遊びを楽しむ。

①見つけた生きもの名前を(教科書や図鑑で)調べたり、観察したりする。

①見つけたことや楽しかった遊び、驚いたことなど不思議に思ったことなどを絵や文などにして表現したり、友達と伝え合ったりする。

①見つけた生きもの名前を(教科書や図鑑で)調べたり、観察したりする。
②「あきのたからものアランド」に必要なものを作ったり準備したりする。
③遊び方やルールをグループで話し合ったり、試して遊んでみたりして工夫する。

①見つけた生きもの名前を(教科書や図鑑で)調べたり、観察したりする。

①絵画作品の製作(図工)

文化祭での展示

地域感謝祭で発表

- 5 関係機関との連携及び内容
散布漁業協同組合：海岸探索

- 1 単元名 「めざせ 生きものはかせ」
- 2 コンセプト A：海に親しむ B：海を知る
- 3 実践のねらい
 - ・海の生きものを育てる活動を通して、生きものたちがすんでいた場所、変化や成長の様子に関心をもち、働きかけができるようにする。
 - ・海の生きものが生命をもっていることや成長していることに気づき、生きものへの親しみをもち、大切にすることができるようにする。

4 年間活動計画（10時間扱い）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
体験的な活動				めざせ 生きものはかせ (10時間)								
探究的な活動				①学校の近くの自然の中（海岸）にどんな生きものを見つけたことがあるかを発表する。 ②安全に気をつけて生きもの探しに出かける。								
発信活動				①飼っている生きものを紹介し合うことについて話し合う。 ②発表の準備をする。 ③クイズや発表・新聞・身体表現などさまざまな方法で発表する。								
(海の子作品展)												
					① 絵画作品の製作(図工)							
											文化祭での展示	
												地域大感謝祭で発表

- 5 関係機関との連携及び内容
散布漁業協同組合：海岸探索

令和3年度 3・4年生 「散布学（海洋編）」 年間カリキュラム

- 1 単元名 「海辺のゴミについて考えよう！」「散布の海の仕事を調べよう」「歩くスキーで冬の湿原散策」
- 2 コンセプト A：海に親しむ B：海を知る C：海を守る
- 3 実践のねらい
 - ・海的环境を保全する活動を通して、自分たちの生活が海とつながっていることを理解し、進んで海の自然を守ろうとする意欲を高める。
 - ・海の自然や資源、人との深いかわりについて関心を持ち、進んで調べようとする児童を育成する。

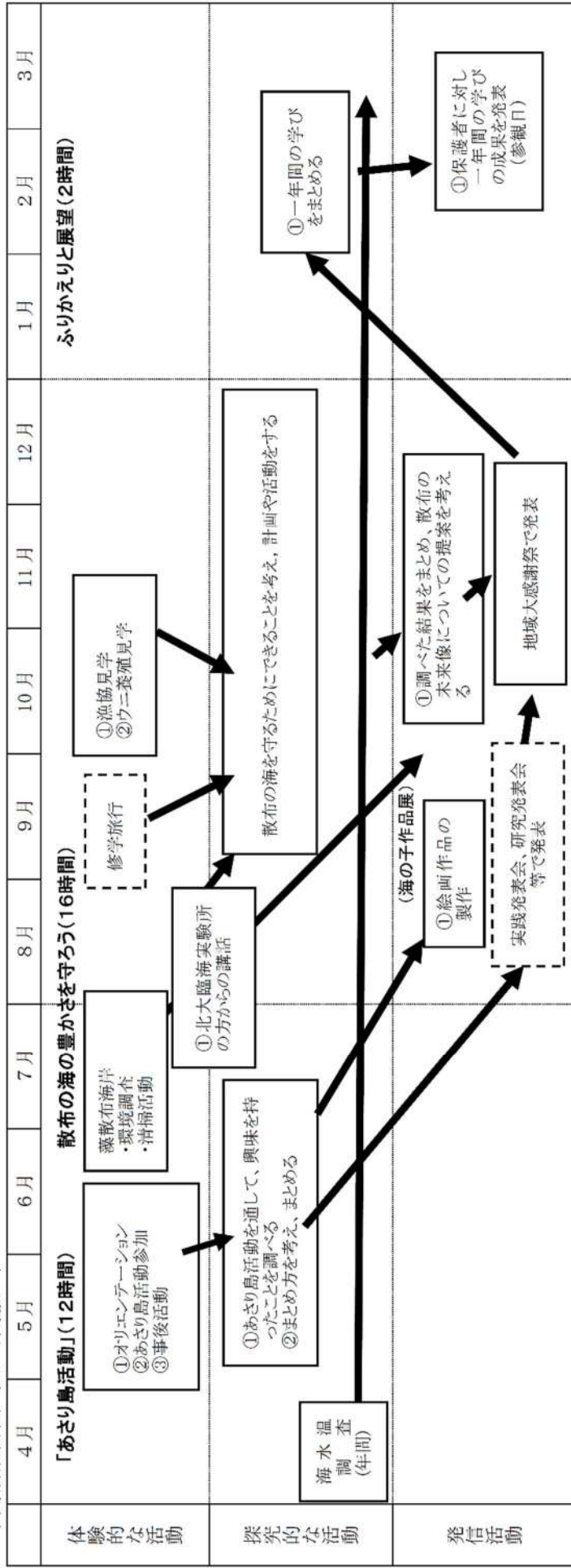
4 年間活動計画（30時間扱い）

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
体験的な活動	<p>「海辺のゴミについて考えよう！」(10時間)</p> <p>①海辺のゴミ拾い(ビーチコミング) ②ゴミを「海のもの」「山のもの」、「人工物」「自然物」に分類</p> <p>①分解されないゴミの割合・出所等を調べる ②マイクログラスチックについて調べる ③自分たちにできることを考える(家庭や地域への働きかけ等)</p> <p>①成果を霧多布湿原センターで発表し、成果物を展示する ②来場者の感想や意見をまとめる</p>											
探究的な活動	<p>「散布の海の仕事を調べよう！」(12時間) (旬の魚介類を使った料理教室)</p> <p>①ウニ養殖見学 ②水揚げ作業見学</p> <p>①地元の水布を使った料理づくり</p> <p>①漁業に携わる人々の苦労や願いを知る(インタビュー等) ②生産性や価値を高める方法を考える(育てる漁業、おいしい食べ方等)</p> <p>①漁と山のつながりについて調べる ②歩くスキーで動物の足跡や野鳥の観察、チカ釣りの見学</p> <p>①一年間の学び(海と山のつながり)をまとめる</p>											
発信活動	<p>(海の子作品展)</p> <p>①絵画作品の制作</p> <p>①調べた結果をまとめる</p> <p>地域感謝祭で発表</p> <p>①保護者に対し一年間の学びの成果を発表(参観日)</p>											

- 5 関係機関との連携及び内容
 散布漁業協同組合：ウニ養殖センター、漁港見学
 AMAMO ワークス：薬散布海岸学習
 霧多布湿原センター：ビーチコミング・歩くスキー講師

- 1 単元名 「あさり島活動への参加」「散布の海の豊かさを知り、守ろう」
- 2 コンセプト B：海を知る C：海を守る D：海を利用する
- 3 実践のねらい
 - ・海的环境を保全する活動を通して、自分たちの生活が海とつながっていることを理解し、進んで海の自然を守ろうとする意欲を高める。
 - ・海自然环境、人との深いかかわりに関心を持ち、進んで調べ、自分たちでできることを見つけて実践しようとする児童を育成する。

4 年間活動計画 (30 時間扱い)



- 5 関係機関との連携及び内容
 - 散布漁業協同組合：ウニ養殖センター、漁港見学
 - 北大臨海実験所：海水温上昇と昆布の生息に関わる講話
 - 霧多布温泉センター、AMAMO ワークス：藻散布海岸学習

次年度以降の年間カリキュラム

A・B年度一覧表

1 はじめに

特例教育課程「散布学（海洋編）」を通じて得た活動をA・B年度に振り分け、主に総合的な学習の時間で2年1巡できる年間カリキュラムを作成した。なお構想にあたっては、特に本校に新しく赴任した職員が漁期や農期等に応じて柔軟に学習活動を展開できるよう、学期ごとの大まかな一覧の作成に留めた。

2 年間カリキュラム

(1) 第3・4学年

大きなテーマを「散布の海の仕事を調べよう」「海と山のつながり」とし、活動を通して地域の産業や携わる人々の思いを理解するとともに、海の自然や資源、人の営みとの密接な関わりについて探究する活動とした。

	A	B
一学期	<p>「海辺のゴミについて考えよう！」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・藻散布海岸（環境調査、清掃活動） ・ゴミを「海のもの」「山のもの」、「人工物」「自然物」に分類する。 ・分解されないゴミの割合・出所等を調べる。 ・マイクロプラスチックについて調べる。 ・自分たちにできることを考える。 	
二学期	<p>「散布の海の仕事を調べよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水揚げ作業、ウニ養殖見学 ・漁業に携わる人々の苦労や願いを知る。 ・生産性や価値を高める方法を考える。 (育てる漁業、おいしい食べ方等) 	<p>「漁業と酪農業を調べよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・漁業と酪農業を調べる。 ・松岡牧場に見学に行く。 ・酪農業のことを知り、地域の産業についての理解を深める。
	<p>絵画作品の制作</p>	
	<p>シマフクロウ・エイドとの植樹活動</p>	
	<p>地域大感謝祭</p>	
三学期	<p>歩くスキーで冬の湿原散策</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海と山のつながりについて調べる。 ・歩くスキーで動物の足跡や野鳥の観察、チカ釣りの見学をする。 ・一年間の学び（海と山のつながり）をまとめる。 ・保護者に対し一年間の学びの成果を発表する。（参観日） 	

(2) 第5・6年生

大きなテーマを「あさりの生態を調べよう」「私たちの海を守ろう」とし、あさり島活動を通して地域の産業や環境保全について理解を深めるとともに、地域をよりよくするために自分たちができることを考え、保護者や地域住民への発表や役場への提案を行うこととした。

	A	B
一学期	<p style="text-align: center;">「あさり島活動」</p> <ul style="list-style-type: none"> あさり島活動を通して、興味を持ったことを調べる。 調査したことをまとめる、発表する。 <p style="text-align: center;">藻散布海岸（環境調査、清掃活動）</p> <p>・津波のメカニズムを知る。 （3年に一度の学習）</p>	<p>・火散布沼の海水温調査（年間）</p>
二学期	<p style="text-align: center;">「散布の海の豊かさを守ろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> 地元の昆布やサケを使った料理づくり 地域の漁業の現状や自然について知る。 漁業の携わる人々の苦労や願いを知る。 漁業にかかわる加工場や飲食店等を調査する。 宿泊研修 散布の未来像についての提案を考える。 	<p style="text-align: center;">「散布の海の豊かさを守ろう」</p> <ul style="list-style-type: none"> 漁協、ウニ養殖見学 散布の海を守るためにできることを考え、計画や活動をする。 修学旅行 沖縄の学校との交流 北大臨海実験所の方からの講話 <p style="text-align: center;">絵画作品の制作</p> <p style="text-align: center;">シマフクロウ・エイドとの植樹活動</p> <p style="text-align: center;">地域大感謝祭</p>
三学期	<p style="text-align: center;">ふりかえりと展望</p> <ul style="list-style-type: none"> 一年間の学びをまとめる。 保護者に対し、一年間の学びの成果を発表する。（参観日） 	<p style="text-align: center;">ふりかえりと展望</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域をよりよくするために自分たちができることを考え、町に提案する。

1 はじめに

平成 31 年度から 3 年間にわたり北海道教育委員会「海洋教育パイオニアスクールプログラム」推進校として研究を進める中で、次のような成果と課題が明らかとなった。

2 成果と課題

(1) 成果

地域の海や水産業、地域の環境などについての探究活動を通して、地域の海と水産資源と環境の結び付きについて理解を深める取り組みを計画・実施できた。また、家庭や地域と連携を図りながら、体系的・継続的に実施できるカリキュラムの作成ができた。これらの教育活動を通して、児童が改めて地域の良さを実感したり、地域の問題に気付いたりしながら、地域を良くしていきたいという思いを育むことができた。

ア 1・2年生

水辺の生き物とふれ合うことで、地域の自然の豊かさに気付くことができた。また、自然の栄養分が海に流れ込むことで、魚、昆布、ウニなどの豊かな海産資源の育成に繋がり、自分たちの生活を支えていることを学ぶことができた。藻散布海岸での活動は、海の環境や環境を守るために必要なことを考えるきっかけとなった。

イ 3・4年生

藻散布海岸での学びを土台として、海の自然や資源、地域の産業について自ら課題意識をもち、進んで調べていくことができた。また、活動の中で「地域の産業に携わる人々の思い」にも触れることができ、より一層地域に誇りをもち、地域の発展に貢献したいという意識を高めるきっかけとなった。シマフクロウ・エイドとの植樹活動では、植樹が森に与える影響や、山と海のつながりについて学び、自然環境への理解を深める姿が見られた。

ウ 5・6年生

藻散布海岸の清掃活動、あさり島活動、シマフクロウ・エイドとの植樹活動、海洋教育実践交流会、海の専門家の講話、沖縄の学校との交流、地域大感謝祭など、様々な活動を通して、児童が地域の発展に貢献しようとする姿に迫ることができた。海の専門家の講話では「2090年には散布の昆布がなくなる」という予測を知り、自分たちの地域の環境に対する意識が高まった。沖縄の学校との交流によって、自分たちの住む地域と共通の課題があることに気づき、今後の活動につなげたいという意欲が一層高まった。

エ あさり島活動

活動を通して地域資源の大切さを再確認するとともに、地域の海洋と漁業について学び、自分たちの暮らす地域の良さを再認識することができた。また、中学2年生が小学校5・6年生教室へ出向き、あさり掘りや外敵駆除のコツを教えるなど、小中の垣根を越えて活動に取り組むことができた。外敵駆除や稚貝撒きの活動を通して、「獲る漁業から育てる漁

業」への意識を高める学習となった。

オ NPO シマフクロウ・エイドとの植樹活動

散布漁業協同組合と連携を図りながら道有林に計80本の苗木を植え、山と海のつながりを学ぶことができた。植樹後は学校に戻り、森に植える苗木を育てるために、ポットに種植えを行った。豊かな海をつくるためには、森づくりが重要であることを全校児童で学ぶ機会となった。

カ 地域大感謝祭

1・2年生は生活科の学習の成果を発揮する場となり、3～6年生はこれまでの海洋教育の学びを発表する場となった。発表後は参加者の反応を受け止め、自分たちの次の活動へ生かそうとする姿が見られた。中学生は地元の物を使ったアイデアや、親子で楽しめる時間、作ったものを思い出の品にできる取組を行い、参加者に好評であった。地域大感謝祭は児童生徒の発信力を高めることができる行事となっている。

(2) 課題

海と人の共生を実現するためには、教科等を横断した幅広い視点から考えることが必要であるため、各学年の活動と教科等の関連を図りながら内容を精査していかなければならない。特に、講師を招いた講話や体験活動の実施時期によって、関連付けられる教科等や内容が変わるため、ねらいを明確にした上で、事前の綿密な計画が必要となる。

また、2年1巡で実施できるカリキュラムの作成、あさり島活動やそれ以外の活動において、中学校とどのように連携を図るかが課題として挙げられる。

ア 1・2年生

これまでの取組をもとに生活科（なつとあそぼう）などとの関連を図り、自分と身近な動物や植物などの自然とかかわりに関心をもたせたり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫する活動を取り入れることで、内容をより充実させていきたい。

イ 3・4年生

児童の課題意識と探究活動につながりが生まれるようなカリキュラムの作成が必要である。また、国語科（リーフレット、ポスター）、社会科（土地の利用）、理科（水のゆくえ）など、これまでの活動と関連を図ることができる教科を整理していきたい。

ウ 5・6年生

3・4年生と同様に、国語科（意見文を書こう、提案文を書こう）、社会科（国土の自然）、理科（自然とともに生きる）などとの関連を図り、教科等横断的な視点を大切にしながら内容の見直しを図っていく必要がある。また、海の専門家の講話や沖縄の学校との交流の実施時期によって、児童の課題意識や目指すゴールへのアプローチの仕方が変わってくるため、ねらいを明確にした上で年間カリキュラムに位置付ける必要がある。どちらの活動も児童の深い学びを促す活動であるため、今後も継続していきたい。

エ あさり島活動

小・中学校の連携のあり方が課題である。元々中学校では、3年1巡であさりの生態を学習していたが、活動に小学生が参加することになったため、いつ、何を、どの学年で学ぶのかを精査し、小学5年生から中学3年生までの学びの系統性を意識したカリキュラム作成が必要である。

オ NPO シマフクロウ・エイドとの植樹活動

「木を植えたら植樹は終わり」という認識ではなく、植樹後の苗木の経過観察など、次年度以降も山と海のつながりを学ぶ活動として継続させていきたい。また、実施時期によって関連付けられる教科等が異なるため、何を目的とするかを明確にし、活動を進めていく必要がある。

カ 地域大感謝祭

新型コロナウイルス感染症対策のため、今年度も保護者のみを招いた開催となった。本来の活動が再開された時には、児童生徒の学びを発信する機会とするほか、地域素材を生かした料理の開発など、地域の新しい魅力を発信していくことができるよう、散布漁業協同組合等と連携を図っていきたい。

3 展望

今年度で「海洋教育パイオニアスクールプログラム」の研究指定が終了するが、今後は、これまでの活動を整理・精選し、主に総合的な学習の時間と関連付けながら全体計画を練り直していく。また、小学校での学びを中学校でさらに深化し、地域の海や水産業、自然環境等についての理解を深め、海を通した世界の人々との結び付きや、それらを持続的に利用することの大切さを理解できる児童生徒を育成していきたいと考える。そのために、各学年の到達目標を明らかにするなど、小中9年間の学びの系統性を意識しながら、全職員の共通認識のもと本校ならではの海洋教育を推進していきたい。

浜中町立散布小学校

校長 大和洋一
教頭 清水秀紀
教諭 百武里弥
教諭 高橋 訓
教諭 小山内 溪
教諭 岡村拓海
教諭 常陸勇馬
養教 森下みなみ
事務 久世雛乃
事生 三浦春美

浜中町立散布中学校

校長(兼) 大和洋一
教頭 井上哲平
教諭 岩城 裕
教諭 林 風華
教諭 齊藤昌義
教諭 尾崎 唯
教諭 鶴見真弥
教諭 近重大治
養教(兼) 森下みなみ
事務(兼) 久世雛乃
事生(兼) 三浦春美

発行日 令和4年3月

発行者 浜中町立散布小中学校

〒088-1536 厚岸郡浜中町火散布 133 番地

TEL/0153-67-2324 FAX/0153-67-2350

HP アドレス <https://tirippuhamanaka.jimdofree.com/>



印刷 釧路総合印刷株式会社

